

## 文教厚生常任委員会行政視察研修報告書

文教厚生常任委員会では、平成30年5月14日～16日の3日間、鹿児島県鹿児島市、南九州市、志布志市にて視察をして参りました。

参加者は、福田克之副委員長、小堀勇人委員、鈴木恒充委員、大橋悦男委員、永井孝叔委員及び事務局職員1名、そして私、大河原千晶であります。

初日視察先の鹿児島市では「いじめ防止基本方針」について、2日目訪問した南九州市では「知覧特攻平和会館」について、3日目訪問した志布志市では「伊崎田保育園」について研修を実施しました。

### 鹿児島県鹿児島市

#### ○いじめ防止基本方針について

5月14日は鹿児島県鹿児島市を訪問しました。

鹿児島県中西部に位置する宮崎県・鹿児島県を範囲とする南九州地域の拠点都市で、政治・経済・文化・交通の中心地です。薩摩・大隈（鹿児島県）・日向（宮崎県南部）の三国を統治した島津氏城下町として発展してきた歴史情緒あふれるまちであり、雄大な活火山である桜島や波静かな錦江湾などの自然にも恵まれたまちです。また、現在NHK大河ドラマでもおなじみの西郷隆盛をはじめ、大久保利通など幾多の英傑を輩出したまちでもあります。

平成25年、いじめ防止対策推進法が成立しました。いじめ問題に関し、PDCAサイクルに基づき、継続的で、効果的な施策を実行することを目指しています。すなわち、いじめを防止するために方針・計画を立て（plan）、方針・計画を実行し（do）、その成果を検証し（check）、次年度以降の方針・計画の改善に役立てる（action）といったPDCAサイクルが条文の随所に盛り込まれているのです。

その中心となるのが、planに当たる「いじめ防止基本方針」の策定です。法は、国と国公私立の小・中・高・特別支援学校に対して、いじめ防止のための具体的な方針・計画を立てることを義務付けています。また、学校の設置主体である自治体に対しても、同趣旨の方針・計画を立てることを推奨しています。平成29年に文部科学省が「いじめ防止等のための基本的な方針」の見直しを行い、それを受けて鹿児島市でも改定を行いました。

鹿児島市のいじめの認知件数は、小学校で382件、中学校で216件の計598件で、この数字は平成27年度より増加しています。しかし、増加しているから問題と捉えるのではなく、いじめが表面化した、発覚したという事実か

らいじめを解消することこそ最も重要なことであると考えています。

鹿児島市のいじめ防止基本方針の印象として、具体的かつ、わかりやすく記載されており、市独自としての取り組みも盛り込まれた内容となっていました。実際には策定にあたり、市独自の施策をどのように盛り込むかを苦勞されたそうです。

鹿児島市のいじめ防止基本方針における特徴について主なものは以下の通りです。

○「鹿児島県青少年問題協議会」の構成について、学識経験者だけでなく、公募に応じた者（市内に居住する満20歳以上）なども明記されている点は同市の素晴らしい特色といえます。

○児童生徒への啓発活動について 心の教育の実施、「いじめ防止啓発強調月間（ニコニコ月間）」の実施、毎年はいじめ防止等に関するリーフレットの作成等の特色あるいじめ防止対策を講じるなど、独自の具体的な取組について記載されています。

○窓口の設置について 「市教育相談室等の電話番号を記載した教育相談カード（いじめ相談窓口～心のダイヤル～）を小・中学生全員に配布」するなど、学校以外の相談窓口を積極的に周知することが明記されています。また、電話相談員として校長経験者や臨床心理士などが対応しています。相談ツールをひとつに限定せず、多くの窓口を作ってどこかにひっかかるような体制を整えています。

○学校におけるいじめの防止等に関する措置について

鹿児島大学の助言の元に開発された『学校楽しいーと』を学期に1回は必ず行い、子どもの回答した結果を分析することで、表に見えない悩みを教員が理解し、不登校やいじめ、問題行動の未然防止や適切な支援を検討することができます。『学校楽しいーと』は誰でもネットからダウンロードできるようになっています

○学校内部の組織について 「いじめの防止等の対策のための組織の構成員」の役割が具体的に記載されています。構成員については、学級担任や部活動顧問の他、「関係の深い教職員を追加」することなども例示的に挙げています。

○教職員間の情報共有について いじめ防止等において、組織で対応することの重要性、情報共有の重要性が明確に示されています。また、管理職の教員に対する危機意識を徹底し、どんなにささいなことでも兆候や懸念を感じる時には必ず報告し、組織として取り組んでいます。

○重大事態への対応に関する組織の構成について 「児童生徒に関する事故等調査委員会」について、「弁護士等の法律関係者、医療関係者、学識経験者、

教育関係者、その他教育委員会が認めるもの」となっており、第三者の専門家で構成されることが明確に規定されています。

巻末資料としていじめ対策のリーフレットや、対応フロー図、また市独自の施策である「ニコニコ月間」や「明るく楽しい学校づくり市民大会」の実施要項なども添付してあることでより読む側にわかりやすく、いじめ問題に対して市民全体として取り組んでいこうという姿勢が感じられました。

さくら市のいじめ防止基本方針でもより具体的に読み手を意識したものにし、いじめ問題を全市的に取り組んでいけるように示していくべきだと感じました。



## 鹿児島県南九州市

### ○知覧特攻平和会館について

#### 1 平和教育について

#### 2 施設運営管理について

5月15日は鹿児島県南九州市を訪問しました。

南九州市は、鹿児島県薩摩半島の南部にあり、知覧町、川辺町、穎娃町が合併して2007年に誕生しました。温暖な気候を活かした園芸作物、茶、畜産を中心とする農業が盛んで、生産食糧供給基地・かごしまの一翼を担っています。特に、知覧茶やサツマイモの生産日本一の市としても知られています。また2014年に青色LEDの実現に貢献し、ノーベル物理学賞を受賞した赤崎勇氏のふるさともあります。

今回視察した知覧特攻平和会館は、第二次世界大戦末期、沖縄戦の劣勢を一挙に挽回するため、人類史上類のない作戦で爆装した飛行機もろとも体当たり攻撃をした陸軍特別攻撃隊員の遺品や関係資料等を収集保存展示しています。

知覧地区が出撃の地であったことから、特攻戦死された当時の隊員の真の姿、遺品、記録を後世に残し、恒久の平和を祈念することが基地住民の責務であると、ゆかりの地である知覧に特攻平和会館が建設されました。

前身であった「特攻遺品館」に全国各地から多くの人々が訪れ、寄せられる反響も大きくなり、遺品も増え展示資料も多くなり手狭になりつつありました。そうして合併前の知覧町が2か年の継続事業として昭和62年に落成しました。事業主体は南九州市で、収蔵資料は平成29年3月末時点で15,023点です。収集資料は、太平洋戦争末期における陸軍沖繩戦の特別攻撃隊に関するものに重点を置き、対象を実物資料としています。資料は、遺族が直接持参されることもあるが、事前に問合せがあり後日送付してくるケースが多いとのこと。

知覧特攻平和会館の事業内容として

(1) 資料の収集・保存活動

遺族の世代交代により、資料の散逸及び滅失が予想されるため資料の収集と保存展示に努め、特攻の史実を後世に正しく伝えるようにしています。

(2) 教育・普及活動

戦争を知らない世代への平和を考える学習の場を提供しており、修学旅行及び教育旅行の誘致を図り、健全で正しい平和学習の推進を図っている。平成29年度の実績として、小学校248校、中学校146校、高校117校が修学旅行等で訪れています。修学旅行等で訪れる学生に対しては、特攻の歴史的背景及び特攻隊員の手紙の特色を、旧知覧町出身の語り部5名が、丁寧に解説をする取組を行っています。

(3) 広報活動

鹿児島中央駅・JR・広島駅・東京モノレール浜松町駅等に電照看板広告をだしています。我々も往路の際に空港へ向かう東京モノレール浜松町駅で偶然にも看板を見かけました。また、館長の娘さんが東京を訪れた際にも看板を見つけ、お父様に報告をなされたとのことでした。

(4) 平和事業

「平和へのメッセージ from 知覧スピーチコンテスト」を毎年8月15日の終戦記念日に開催しています。このコンテストは知覧特攻平和会館に届いた1女子高生からの手紙がきっかけとなり、平成2年から「あした いのち かがやけ」をテーマに始まりました。

また、学習推進事業として平成30年からは「平和を語り継ぐ都市」をスタートしました。毎年4万人を超える県内外の小中高等学校の児童生徒が修学旅行などで知覧特攻平和会館を訪れているが、過去10年間の南九州市内の小中学校の利用状況は、小学校が40パーセント、中学校で70パーセントと、郷土教育の充

実・振興及び郷土素材を活用した平和学習が十分ではない実態があります。そこで、南九州市独自の教育内容として「平和を語り継ぐ都市」学習を特設させ、郷土素材を活用した平和に関する教育の推進を図っていくそうです。

具体的には、各学校の実態に応じて知覧特攻平和会館へ訪問し、語り部の講話や会館内の展示物、周辺の戦跡等で主体的に学ばせ、平和学習の充実を図っていきます。会館が建設された時の「地元住民の責務」という意識が、何人もの若い尊い命の出撃を見守ってきた知覧の人たちの心に今も受け継がれているように感じます。平和学習の資料館として、当時の事実・心情を後世に正しく伝え、考えさせ、ありのままを展示している会館で学べることは、戦争を知らない世代が台頭していく中で重要なことであるし、地元の子どもたちが大人になって守り引き継いでいってほしいと願います。

そんな中、資料の保存管理は運営の大きな課題となってきます。資料の大半は紙類で、昭和10年代の洋紙は酸性紙とよばれ劣化しやすい材質で作られています。様々な材質で作られた紙に、様々な筆記用具で書かれているため資料ごとに劣化状態が異なります。そのため平成25年から5か年計画でレプリカを作成し、収蔵庫と展示室の定期的な入れ替えを可能にした上で、平成29年度からは資料ごとに劣化状態を見極めるカルテ作成に取り組んでいます。近現代の紙の保存修復の研究は未だ途上であるため、会館の調査結果に基づく研究成果をオープンにしています。この分野の研究の進捗に貢献しています。

その他、250点の遺書、手紙等を現代語と並列して学習できる資料解説システムを5台設置しているほか、タブレットを用いたガイドシステムを貸し出し、映像、音声及び字幕（日本語・英語・中国語・韓国語）により解説しています。入館者数の推移としては、平成29年度は38万1,647人の入館者でした。ピーク時であった平成14年度の73万6,000人でしたが、年々減少しています。企画展などに工夫を凝らし誘客に努めていますが、最近では特攻隊員の母校である中央大学と連携し、大学のキャンパス内で企画展を開催し、資料展示も行ったそうです。会館を訪れなくとも伝えていく方法は、大学との共同開催だったからこそ可能になったそうです。また、「特攻の事実を後世に正しく伝える」「平和学習の場としての提供」のためには、観光施設ではなくともどうしても観光業者・旅行業者に頼らざるを得ないのも事実で、全国の観光業者・旅行業者と観光券契約をし、誘客に努めています。

本市における歴史的施設等の運営はもちろん、息の長い施設運営を行っていく工夫などにおいても大変参考になりました。しかしながら今回の視察研修において最も心に深く残ったのは展示されている資料そのものの力でした。概要説明の際に、実際の特攻隊員の遺書を紹介していただきましたが、あまりの衝撃に研修中にもかかわらず涙が止まりませんでした。教科書などには載っていない

い資料は、見る者に必ず何かを感じさせることができます。このようにリアルな資料館は平和教育において大切な場所であることを感じるとともに、本市における平和教育のあり方についても考えさせられました。



## 鹿児島県志布志市

### ○伊崎田保育園について

最終日の5月16日は鹿児島県志布志市を訪問しました。

志布志市（しぶしし）は、鹿児島県東部の大隈半島の付け根の部分に位置する宮崎県と接している市で人口は約3万1,000人です。市の南部は志布志湾に面し、国の中核国際港湾である志布志港が整備されています。志布志港からは、国内外へ複数の航路が設けられており、南九州地域での重要な役割を担っています。

視察先である伊崎田保育園は、プロゴルファー横峯さくら氏の叔父にあたる横峯吉文氏が理事長を務める保育園で、「ヨコミネ式」と呼ばれる同氏が提唱する幼児教育法を実践する園でもあります。

「ヨコミネ式」は子どもたちが「自立」すること（自ら考え、自ら判断し、自ら行動し・実践すること）を目的にしており、「すべての子どもが天才である」という考え方を前提に、自立に必要な「心の力・学ぶ力・体の力」を育むことで子どもたちが持つ可能性を最大限に引き出していきます。

子どもの「できることは面白い」→「面白いから練習する」→「上手になると大好きになる」→「次の段階に進みたくなる」という法則により、生まれ持っている才能を開花させるのだそうです。また、「子どもは競争したがるスイッチ」、「子どもは真似をしたがるスイッチ」、「子どもはちょっとだけ難しいことをしたがるスイッチ」、「子どもは認められたがるスイッチ」の4つのスイッチより自立に必要な3つの力が備わっていくのだそうです。

園では実際の子どもたちの学びの様子を視察しました。子どもたちの一日のタイムスケジュールは決まっており、一般的な保育園と比べ独特のカリキュラムで構成されています。まずお昼寝の時間が存在しないこと、英語や体操、読み書きそろばんに加え特に特徴的だったのはピアノの授業です。ピアノの授業では先生の弾いたピアノの音をピアノで再現するばかりか、実際に音当てしてドレミで答えます。また、年長さんの教室では最初に100ます計算が行われていました。解答が埋まった子から挙手をし、その後はそれぞれ自分の読み書きの練習をするのですが、驚いたのは読んでいる本が小学校3年生の国語の教科書であったことや、漢字の書き取りをしていたことです。それもやらされているのではなく、子どもたちが自ら自分のペースに合わせて進んで取り組んでいました。国語の教科書を音読している女の子は、指で字を追いながら声に出して読んでいましたが、本人の字でフリガナがふってあり本もくたくたで、かなり読みこんでいる形跡が見られました。合奏の時間では子どもたちがパートに分かれて演奏するのですが、同じ楽器だとしても同じように演奏するわけではありません。誰一人欠けても音楽にならないような難易度の高い演奏を見事に披露してくれました。子どもたちは昼休みの時間を利用してパートごとに練習し、半年かけて一曲を完成させるそうです。得意不得意があっても、最後には必ず全員が演奏できるようになるそうです。視察の最後には体操の時間を視察しましたが、全員が逆立ちで歩いたり、交互に片手ずつ逆立ちするトレーニングをしたり、側転やバク転で移動したりと全員が同じようにできていることに驚きました。ひとつひとつのカリキュラムにかける時間が長くても30分と、目まぐるしく動くタイムスケジュールの中だからこそ子どもたちが集中して取り組み、また反復できるのだと感じました。反復する中で自分自身の成長を実感でき、自ら進んで取り組むようになるそうです。教室には障がいをもつ子どもも同じ空間で学んでいます。他の子どもたちと同じように過ごしていました。一般的にかなり高度なことや難易度の高いことがすべての子どもにおいてできていましたが、先生方の一人一人に向き合う姿勢にも驚きました。自発的に学ぶ子どもたちに付き合っ、空き時間や自由時間を費やします。また、積極的に手を出さないようにしています。できるまで手を出さずに見守り、できたら認めてほめてあげる。子どもに向き合う姿勢に感動するとともに、このように取り組んでくれる保育士を育成するのも苦勞するのではないかと感じました。しかし、保育士の確保より雇用の確保の方が大変だとのこと。志布志市は人口も少なく、進学を機に転出する若者も多く、雇用の確保には苦勞されているとのことでした。しかしながら、先生方はやりがいを感じておられ、離職率は低く、だからこそなんとかやりくりできているとのこと。設立当初こそ保護者の方からの理解を得るのにも苦勞されたそうですが、



ヨコミネ式で学びたいという入園希望者が後を絶たないほど確立された今では、先生方も保護者の信頼のもと、子どもたちと向き合うことができているのだと感じました。そのことが双方にとって良い結果をもたらしていると感じましたので、その点においてはさくら市においても参考となると感じました。また、学童保育の受入れも園で対応しており、保育園から卒園後の小学校と切れ目ない教育の場が確立されています。さらに近隣の小学校からは、学校内で子どもたちの様子から学校側からの課題を学童保育に出されたり、交流会なども行われるなど連携ができています。

我々の視察に対応してくださった園長先生の「飛ぶことが重要なのではなく、飛ぶまでの心の課題が大切」という言葉が印象深く残っています。たくましく、小さな体全部で学ぼうとするこどもたちの姿に、教育のあり方を考えさせられる機会を得ました。大変有意義な研修でありました。視察研修で学んだこと、感じたことを今後のさくら市政に活かしていきたいと思います。

